

PC を活用した地域日本語教室における文字教育

WOO Wai Sheng 大阪大学大学院言語文化研究科
御子神慶子 財団法人海外産業人材育成協会
新庄あいみ 元大阪大学サイバーメディアセンター
新矢麻紀子 大阪産業大学教養部
永井慧子 生活の漢字をかんがえる会

COMPUTER ASSISTED JAPANESE CHARACTERS LEARNING CLASS FOR FOREIGN RESIDENTS

Wai Sheng WOO, graduate student of Osaka University
Keiko MIKOGAMI, lecturer of The Overseas Human Resources and Industrial
Development Association
Aimi SHINJO, former lecturer of Cybermedia Center, Osaka University
Makiko SHIN'YA, associate professor of Osaka Sangyo University
Keiko NAGAI, member of *Seikatu no kanji o kangaeru kai*

概要：本発表では、日常会話をある程度習得した「生活者としての外国人」を対象として、「実生活で読む必要がある漢字・語彙から学ぶ」というアプローチによる、PCを活用した日本語の文字教育実践について報告する。従来の「学ぶ→覚える→使う」という学習方法から、「見る→わかる→使う→覚える」への転換と、PC使用による日常生活の文字がある風景の教室への持ち込みという外国人に対する新たな教育内容と教育方法による文字教育実践モデルの提案である。教室では作成したワードファイルを映写すると同時に、学習者のパソコン上にもファイルを置き、教師の操作を追って学習者自身が入力・検索などを行うことによって、漢字学習と同時に、PCリテラシーが習得でき、学習者にとって大きなメリットになった。

キーワード：地域日本語教室、文字教育、定住外国人、漢字教育における PC の活用、実生活の中の漢字情報

1. はじめに

日本で生活する外国人にとって日本語の習得は喫緊の課題であり、特に文字の意味理解と読み書き能力は彼らの社会参加を左右する一大要因である。しかし、地域の日本語教室では文字教育は会話教育ほど重視されていない上、その方法論も日本の学校教育同様、形の簡単な漢字から順にただひたすら「書いて覚える」式であるため、日常生活に必要な漢字の学習までに膨大な時間と労力を要し、学習の挫折につながっている。

本発表では、ひらがな及びカタカナができ、かつ日常会話をある程度習得した非漢字圏の「生活者としての外国人」を主な対象者として、「実生活で読む必要がある漢字・語彙から学ぶ」というアプローチによる、PC を活用した日本語の文字教育実践について報告する。

これまで、地域日本語教室においては、学習者全員が PC を使用して行う文字教育実践は前例がなく、またシラバスに関しても、定住を目的とする外国人には適切なものが存在しな

かった。本発表は、従来の「学ぶ→覚える→使う」という学習方法から、「見る→わかる→使う→覚える」への転換と、PC 使用による日常生活の文字がある風景の教室への持ち込みという外国人に対する新たな教育内容と教育方法による文字教育実践モデルの提案である。

2. 教室の概要

本発表における教室実践は文化庁委託「生活者としての外国人」のための日本語教育事業（日本語教室設置運営）「日本で暮らしている外国人のための漢字教室」で、大阪市立総合生涯学習センターで2011年9月から2012年の2月までの間に全20回（1回3時間）実施した。20回のうち、14回はPCを用いた学習であった。残りの6回は教室終了後の自律学習に繋がるように、PCを用いずに漢字の仕組み（漢字の構成、音訓、部首等）の学習を体系的に行った。定員はPC台数の関係から24名とした。

教室では、まず学習者に日常生活で文字理解が必要な場面についてアンケート調査を実施し、授業のテーマを選定した。テーマを授業で実施した順に表1で示す。

表1 テーマの一覧

回	テーマ
1	パソコンの基本操作、かな入力
2	カレンダー（おまけ：お金）
3	漢字の構成1（ベーシックストローク）
4	日本人の名前
5	買い物1（商店街、スーパーの売り場）
6	買い物2（食品表示、スーパー内表示）
7	漢字の構成2（部首&旁＝意味の記号）
8	病院
9	薬
10	住所手書き
11	ごみ
12	災害情報
13	年賀状
14	公園（災害時避難所など）
15	銀行・ATM
16	漢字の構成3（音訓読み、部首、音の記号）
17	電気製品
18	郵便受けに入っているもの（公共料金&不在連絡票）
19	パート・アルバイト探し&大阪の路線図
20	住所の手書き練習、等

3. 教室実践の内容

教室の第一の目標は「読める」こと、つまり日常生活において必要な漢字を認識することができることである。例えば食品表示、ATM 画面や災害情報など日常生活で目にする文字を認識し、必要な情報を得られるようにした。教室の第二の目標は自律的学習能力の養成である。また、PC リテラシーの獲得により、漢字学習に有用なインターネット上のリソース

が利用可能となったのみならず、広く実生活に必要な日本語入力・ルビ振り・情報検索などのスキルも身につけた。

学習の基本的な流れは次の通りである。まず、テーマに関連する実物の写真をワードファイルの形でプロジェクターおよび学習者の各々の PC で提示する。次に、写真から目標漢字を見つけ、意味を理解する活動を行う。意味を理解したのち、目標漢字の入力練習に移行する。最後に、目標漢字の中で最も重要なものをピックアップし、認識力を高めるために書く練習を行う。目標漢字はテーマによって数が異なる。

提示用の写真は各回の講師が自ら撮影したものやインターネット上のものに編集を施したものであった。ファイルは学習者が打ち込むことによって、カスタマイズされた自分だけのものとなる。CD に保存し、自宅に持ち帰って、復習に利用してもらった。

また、学習者が身の回りで見かけ、読みたいと思う漢字を写真撮影して教室に持ってきてもらった。授業ではそれらの写真をプロジェクターや書画カメラなどで映し、学習リソースとして活用した。その他、ごみの収集日程を調べる、日本語教室を調べるなど、トピックによっては情報検索も行い、ふりがなツールの紹介などもして、インターネットの日本語ページの利用へとつなげた。

4. 教室実践の成果—教師側の観察および学習者へのアンケートから—

4.1 教師側の観察から

【文字の入力について】

学習者は、目標漢字の入力を、ローマ字入力にするか、かな入力にするかを選択することができた。全ての学習者にかたとローマ字の対照表をプリントで配布し、入力練習を行った。その際、よく問題となるのが長音、拗音、促音、清半濁・濁音の4つである。口頭言語ではこれらが正確さに欠けてもコミュニケーションに支障を来たすことはないものの、文字言語では正しく入力しなければ目標漢字に変換されないため、学習者一人ひとりに確認し、入力作業を補助した。学習者は最初は悪戦苦闘していたようであるが、次第に音声に意識を向けるようになり、正確に文字入力できるようになっていった。

【音声言語と文字言語の結びつきについて】

学習者は新規来日者から20年以上日本に居住している者まで幅広く在籍していたが、多くの既知語彙を持つ学習者でも、音声言語としての知識のみで、文字には結び付いていない者が多かった。PC を活用した文字学習では、「目標漢字の認識→意味を理解する→入力練習」を繰り返すことによって、音声+文字+意味という語彙知識を完成させることが可能になった。

【学習者間の交流と協働的学習について】

学習者間には日本語能力にも PC 操作能力にも差が見られた。教師側からのサポートは無論あったが、学習者同士においても、漢字や語彙を教え合ったり、PC の操作に長ける者が不慣れな者を補助したりすることが観察された。これらのインターアクションを通して学習者間の連帯感が強まり、教室が協働的学習の場となった。

4.2 学習者へのアンケートから

下記、アンケートからの抜粋である。日本語以外で回答されたものは和訳した。

【PCを用いた文字学習について】

- ・日本語でパソコン操作ができるようになった。
- ・パソコンとかんじ、おぼえたのがよかったところです。
- ・写真、漢字一緒におぼえやすい。

【漢字の読み書きについて】

- ・20年間日本に住んでいたけれどわからなかったことがいろいろあった。このクラスでは、漢字を使って（ATMから）お金を引き出す方法などをたくさん学ぶことができた。
- ・病院でじをかくことができました。
- ・自分ひとりで会計を支払うことができる。来年、友人にポストカードを送ることができる。

【自律的学習能力の養成について】

- ・すごくじがかけるようになりました。
- ・家でも漢字の練習をするようになりました。
- ・漢字がおもしろい。部首の意味がわかる。（例、さんずいの意味がわかること）

【精神面における変化について】

- ・ひとりで、ただ毎日無口。いまは笑顔でました。あかるくなりました。

5. おわりに

本発表におけるPCを活用した文字教育の教室実践は20回という短期間であるため、需要があるにもかかわらずカバーできなかったテーマは数多くあった。しかし、従来の地域の日本語教室にはないPCを用いた教室活動によって、漢字学習と同時に、PCリテラシーが習得できることは学習者にとって大きなメリットになったといえよう。

今回の教室では、実生活において、自国語でPCを使っている者と、使っていない者が混在していたため、初めてPCに触れる者にとっては、大きなプレッシャーがあったと推察される。事前に、PC初体験者に対する予備講座があれば、より充実したものに成り得たと考えられる。

外国人が日本に長く暮らしていくうえで、文字言語の習得、特に、生活に密着した「生きる力」となる文字言語というリテラシーの獲得は必須である。また、文字のみならず、今やITリテラシーも就職や転職、そして日常生活にも欠かせない能力となっている。

本発表で報告した生活に密着した教育内容とPCを活用した教育方法による新しい文字教育実践は、外国人の生活の質(quality of life)を高め、閉ざされていた世界を拡張する機会を与えるとともに、まだほとんど開発が進んでいない地域日本語教育に一石を投じる有効な文字教育の方法論を提供できたと考えられる。